3-1

主題	住民主体による社会資源の可視化から見えた地域力
副題	「あったらいいな」「できそう」からスタートした生活支援のしくみづくり

キーワード 1	住民主体	キーワード 2	生活支援	研究(実践)期間	17 ヶ月

法人名・事業所名	社福）墨田区社会福祉事業団　うめわか高齢者支援総合センター
発表者（職種）	齊藤直子（社会福祉士）、村上明美（看護師）
共同研究(実践)者	曽根久之（社会福祉士）

電　話	03-5630-6541	ＦＡＸ	03-3614-9160

事業所紹介	うめわか高齢者支援総合センター（地域包括支援センター）は、墨田区の高齢者福祉の増進と介護サービスを提供するための複合施設「シルバープラザ梅若」に設置され、梅若ゆうゆう館、うめわか高齢者みまもり相談室、福祉機器展示室、うめわか高齢者在宅サービスセンターを併設している。

《1．研究(実践)前の状況と課題》

うめわか高齢者支援総合センターは、東京都墨田区の最北部に位置する地域包括支援センターである。区内でも、高齢化率（令和３年４月１日現在 29.1%）、後期高齢化率（15.7%）が高く、なおかつ 75 歳以上の高齢者の 39.4%がひとり暮らしで独居率も高い。ニーズ調査によると「買い物する場所が近くにない」「鉄道やバスの利用が不便」「家族が近くにいない」など課題が多い地域である。

《2．研究(実践)の目的ならびに仮説》

上記の地域性を踏まえ、地域ケア推進会議（生活支援・介護予防）推進事業として、ちょっと困ったときに住民同士で支え合うしくみをつくるため「ちょこっとサービス応援団」の活動が、令和４年２月より始動した。多くの課題を抱える「うめわか圏域」において、はじめてのしくみづくり、どう進めていけば住民にとって取り組みやすくできるのか。その過程に焦点をあて、４つの仮説をたててみた。

①はじめに「あったらいいな」から住民の声を吸い上げることで、課題への取り組みがイメージしやすくなるのではないか。

②「できそう」から取り組みの優先度を決めることで、課題に対して動きやすくなるのではないか。

③しくみづくりへ向けた第一歩として、何か「やってみる」ことで、見えるものがあるのではないか。

④ある程度の時間をかけても、住民同士で取り組めるよう関わることで、住民の主体性を引き出せるのではないか。

《3．具体的な取り組みの内容》

参加者は、地域住民、見守り協力員、民生委員・児童委員、医療・介護・福祉関連機関の専門職。計 27 名、延べ人数 133 名が参加。地域ケア推進会議は区と社会福祉協議会職員も出席。担当職員４名。取り組みの期間は、令和４年２月から令和５年６月まで、地域ケア推進会議３回、ミーティング計７回開催した。現在も継続中。

無断転載・複製を禁じます。

・地域ケア推進会議（２月）では、地域の見守りやちょっとした支え合いについて意見交換（「すでにあるもの、やっていること」「あったらいいな」の共有）。
・第１回（3月）第２回（5月）ミーティングでは、自分たちで新たに「できそう」なことや優先度を話し合う。社会資源の可視化および情報伝達ツールとしてリーフレットを作ること、まずは命を守る「食」関連に着手することで決定。
・地域ケア推進会議（７月）では、リーフレットに掲載するお勧め飲食店、出前、持ち帰りの情報交換。
・第３回ミーティング（９月）では、主要団員（役員）９名でリーフレットの全体像を決定。
・第４回ミーティング（11 月）では、店舗への調査票（掲載の承諾、記載内容）を検討。40 店舗への訪問を団員９名で分担。
・第５回ミーティング（１月）では、サイズやデザインについて意見交換。全体構成を決定。
・第６回（2月）第7回（3月）ミーティングでは、パソコン担当の団員が作成した案を基に、内容の確認と修正を繰り返し、完成の目途がたつ。
・令和５年3月末リーフレット完成。A3サイズ2枚4つ折り、1000 部印刷、印刷代 18990 円。
・地域ケア推進会議（６月）では、令和５年度の新たな取り組みとして、住民主体による生活支援を形にするために、「できそう」の中から話し合いを開始。

《4．取り組みの結果》

リーフレット「うめわか周辺　美味しいものマップ（今日の食事が明日のあなたを作ります）」は、内容の企画、構成、デザイン、パソコン入力作業まで、ほぼすべてを団員が協力し合い作成した。完成したリーフレットは、団員の手で担当したお店や必要とされる近隣住民の方へ配布。さらに圏域の自主グループ、町会、自治会、民生委員・児童委員、医療機関、薬局、保健所、介護サービス事業所の方などに、団員の活躍も含め周知を行った。リーフレット完成後、団員からは「形になるうれしさがある」「ミーティングに参加するのが楽しみ」「皆の力が強い」「地域に配布していきたい」などのやりがいや達成感だけでなく、リーフレットの活用方法として「心配な方への訪問のきっかけに使用したい」や、次の取り組みに向けて「これからも応援団の活動を続けていきたい」という声もあがった。

《5．考察、まとめ》

「ちょこっとサービス応援団」による社会資源の可視化は、地域の取り巻く環境や団員の想いをリアルに映し出したものとなった。その過程では、団員一人ひとりが、度重なるミーティングやお店との交渉、新たな人との繋がりなどを経て、団員たちの手でリーフレットという形にすることができた。特に、「食」をテーマに単なるお店の情報だけでなく、表紙のサブタイトルである「今日の食事が明日のあなたを作ります」という、地域に向けた団員からのメッセージにもなっている。さらに団員の「特技」を活かしたことでアイデアの幅が広がり、団員同士の連帯感ある取り組みの実現にもつながった。そこには「うめわか圏域」にある地域力の存在が見られた。そして現在、団員たちは新たな取り組み向けて動き始めている。

《6．倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7．参考文献》

「うめわか圏域地域包括ケア計画」令和３年３月発行
日本地域看護学会誌　学術集会報告　第 23 巻第３号　令和２年 12 月発行

《8．提案と発信》

住民主体による生活支援のしくみづくりを進めていく上で、一つひとつの取り組みの積み重ねや成功体験が地域力を高め、発展性のある地域独自のしくみを生み出していくのではないかと考える。

無断転載・複製を禁じます。